「まち」が変わる!? 自治基本条例⑩

政策企画課 Tel 224-5503

自治基本条例キーワード「住民自治」

なぜ地方分権は必要なのでしょうか。そのカギは、憲法第九十二条の「地方自治の本旨」にあります。地方分権は、「団体自治」「住民自治」を具体化する試みといえます。

国の事務権限などが地方に移り、地域の個性を生かせる範囲が広がって、自治体が国から独立しているという団体自治が充実します。これが地域住民やその代表者の意思に基づいて進める住民自治の充実にもつながります。

自治体が地方分権の基本理念ともいえる、個性豊かで活力に満ちた地域社会の実現を図っていくためには、より直接的に住民自治を充実していくことが求められます。そして、より多くの地域の人々が加わって地域の事柄を「みんなで決める」ことが重要になります。そのことを進める一つの方法として自治基本条例があるのです。

BOOK NAVI 読みたい本はありましたか

中央図書館 Tel 222-0559

市立図書館には、約八十万点もの本や雑誌などの蔵書があります。「料理に関係する本を読んでみたいけれど、タイトルが思いつかない」「太宰治（だざいおさむ）の本を読んでみたい」、そんなときは良い方法があります。市ホームページにある、図書館蔵書検索を利用してください。フリーワード検索や、出版者名での検索、新しい本・よく読まれている本などさまざまな検索方法で、本を検索できます。貸出カードを持っていて、パスワードを登録していれば、予約することもできます。

「読みたい本が市内の図書館にない！」。そんなときは、予約（リクエスト）制度を利用してください。県内公立図書館の蔵書約二千三百六十万冊の中から、借りることができます（本・雑誌のみ対象）。本の予約（リクエスト）カード（写真上）に記入し、提出してください。

たくさんの蔵書が、皆さんからのリクエストをお待ちしています。

短歌・俳句・川柳

文化振興課 Tel 224-6157

平成23年度入選作品

短歌

地震にて棚より落ちしオルゴール落ちしはづみに音の鳴り出づ
佐藤淳子（小ケ谷）

明治より続くわが店たたまむと破格値つける商品あはれ
可児昌子（元町一丁目）

故郷の農のくらしのよからんか兄妹三人九十超えぬ
細野政子（仙波町二丁目）

七夕の花火鳴りゐる枕辺に臨終の近き母を見守る
吉野清子（脇田本町）

背を丸め歩む姿が亡き母に似ると妹われの背を撫づ
齋藤隆子（西小仙波町一丁目）

俳句

百歳の母と唱歌の良夜かな
橘木悦子（霞ケ関東五丁目）

水音も薬味のひとつ走り蕎麦
渡辺秀雄（小仙波町三丁目）

一筋の灯となり列車花野行く
戸田雅子（山田）

ふしくれの手に収穫の祭り酒
西脇康之（稲荷町）

秋天を蹴って少女の逆上がり
横溝幸子（霞ケ関東二丁目）

川柳

積み上げた努力へ明日の虹も見え
中林和子（野田町一丁目）

肌の色越えて音符は木霊する
時枝利幸（今福）

支援また支援にめげぬど根性
福田案山子（豊田町一丁目）

やんわりと漢方薬が効いてくる
和田ふみの（松江町二丁目）

ロンドンへ若さが跳ねるE難度
本間四郎（旭町三丁目）

市長からの手紙

⑲予算編成

現在、予算査定の最終段階です。各課が要求してきた予算について、事業の重要性や優先度を考慮して予算額を決めていきます。川越市も他の自治体もそして国も、少子化、高齢化の進展とともに民生費(生活保護や国民健康保険、介護保険などの費用)が毎年増加し、それに対して税収が伸びない、むしろ不景気の追い打ちで税収が落ち込んでいるという状況で、財政は大変厳しいものがあります。

予算査定は、歳入と歳出予算の乖離(かいり)をどう解消するかの作業ですが、歳入は限られているので、端的には歳出を削減することでこの乖離をなくすという作業になります。市民の皆さんのためにやらなくてはならない事業は着実に進めながら、先送りできる事業は少し先送りし、効果の薄い事業は手控えるなどの決定を個別にしていきます。

ところで、名古屋市は市長の公約である恒久(期限を決めない)減税を、昨年暮れの議会で条例化しました。市長の公約は10%減税でしたが、議会と5%減税で妥協が成立したとのことです。川越市と名古屋市とでは、市の規模も違いますし、取り組まなくてはならない事業も違うと思います。しかし、この厳しい財政状況の下で減税して歳入を大幅に減らしたら、今後の財政はどうなるのだろうかと、他市のことながら心配です。「行財政改革で無駄をなくせば減税分くらいは十分まかなえる」というのが、名古屋市長の持論でした。どのようにその言葉を実現していくのか大いに関心があるところです。

川越市の財政を考えたとき、他の自治体も大同小異だと思いますが、減税という選択肢は極めてハードルの高い選択肢です。減税後の財政がどうなっても、「それは後任者に任せる」と割り切れれば選択肢としてはありえます。しかし、それではあまりにも無責任ですし、結局つけを後輩や子どもたちに払わせるだけのことになります。つけを将来に残さないようにするとともに、無駄な出費を無くす努力を続けながら来年度の予算を作っています。もちろん、市民の皆さんが川越市で暮らしていくうえで、更に満足していただけるような新たな事業を始める努力も怠ってはいません。

川越市長　川合善明

人権教育シリーズ

児童・生徒の人権作文 21

教育指導課 ☎224-6114

平成22年度に市内の小中学生から募集した作文をまとめた人権文集「あけぼの」から、作品を紹介します。

祖母と私②

中学三年

この時、私は祖母が自分から離れていく気がして、もう祖母が祖母でなくなるように思えて、とても寂しかった。そして、私は祖母のことから目を背けた。また、私は祖母から逃げたのだ。彼女の異変に気づいたときと同じように、一度塞いだ目と耳はそう簡単には開かなかった。

私が祖母の家に行くことも祖母の話をすることも少なくなっていった。母の口から祖母の話が出そうなときは適当に話をそらしてしまったし、自分が世話になった祖母の洋服店が閉まってしまうときも何も思わなかった。施設へ行って祖母に会うことも、もちろんなかった。

そんな、ある日のことだった。母が私に、

「おばあちゃんの所へ行きましょう。」

と言った。私が浮かない顔をしても母は許してくれなかった。理由はわからなかったけれど、絶対に連れて行くという意志を母から感じ取ったので渋々ついていくことにした。途中のバスで、母は私に祖母の近況を教えてくれた。祖母は今ではもう母の名前さえも時々間違えるらしい。(それでは、私のことも忘れているかもしれない。)と私は諦めに近い気持ちで、いつの間にか目の前にあった施設のドアを押していた。

「おばあちゃん・・・・・・。」

施設の中に祖母らしい人を見つけてぎこちなく声をかけた。長い間、会いに来なかった罪悪感で心の中は不安に満ちていた。(覚えていてくれるかしら。)すると、祖母は目をぱちくりさせてすぐに、こう言った。

「春美じゃないか。久し振りだねぇ。」

ほっとした。そして、嬉しかった。

(つづく)